

福島県喜多方市  
灰塚山古墳第2次発掘調査報告

辻 秀人・横田 竜巳・武田 翔平・菅原 健太  
名久井伸哉・石橋 咲紀・高橋 萌子・日谷 旭

## 調 査 体 制

調 査 期 間	平成 24 年 8 月 5 日～8 月 26 日、9 月 3 日～9 月 6 日
調 査 主 体	東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
調 査 員	佐々木拓也・成田 優・服部芳治・星野剛史・松本尚也・森田彩加・ 横田竜巳・吉田龍司（4 年生） 小野寺美聡・武田翔平・菅原健太・名久井伸哉・石橋咲紀・高橋萌子・ 日谷 旭（3 年生）
調査参加者	芦野 悟・阿部大樹・小田菜月・大場雅美・岸 知広・木村圭佑・ 佐々木雪乃・志藤貴俊・澁谷若菜・東海林裕也・菅原里奈・田邊茉依・ 中條麻美・西川悠也・廣瀬拓磨・藤原 翼・升澤貴裕・宮崎真理子・ 森 千可子・谷田部隆章・結城彩花（2 年生） 和泉絵理・木村緋花梨・佐藤智恵・鈴木里奈・畠山沙貴・三浦悠里花 （1 年生）
調 査 協 力	喜多方市教育委員会・東洋興産株式会社・ 山中雄志、片岡 洋（喜多方市教育委員会）・田部文市（新宮区区长）、 渡辺和男
土地所有者	新宮区

## 例 言

- 1、本書は平成 24 年 8 月 5 日～8 月 26 日、9 月 3 日～9 月 6 日実施した福島県喜多方市灰塚山古墳第 2 次発掘調査の報告書である。
- 2、調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
- 3、調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は考古学ゼミナール所属東北学院大学文学部歴史学科の 3、4 年生、考古学実習 I を履修する 2 年生、及び参加を希望した歴史学科 1 年生である。
- 4、出土遺物、作成図面の整理は東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の 3 年生が中心となって実施した。
- 5、本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。
- 6、本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を示す。

## 序章 調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールでは、東北古墳時代の様相を解明することを目標として活動を継続している。福島県会津地方に多く古墳が分布することはこれまでによく知られてきた。中でも会津盆地東南部の一箕古墳群、東北部の雄国山麓古墳群、西部の宇内青津古墳群は前期の首長墓の系譜を3代以上にわたってたどることができる、有力な古墳群である(辻 2006)。調査の対象とした喜多方市灰塚山古墳は宇内青津古墳群の最も北に位置する前方後円墳である。

灰塚山古墳はこれまで、福島県立博物館によって測量調査が実施され(福島県立博物館 1987)、全長 60 m を超える大型前方後円墳であることが判明している。宇内青津古墳群では亀ヶ森古墳に次ぎ 2 番目の規模である。古墳の形態も宇内青津古墳群の中ではやや異質であり、最北を占める位置もあってその内容が注目されてきた。ただ、出土遺物が知られておらず、所属時期等についての手がかりがなく、古墳の範囲も測量段階では必ずしも明確にはされていなかった。

今回の調査は、宇内青津古墳群の中で最北の大型前方後円墳の姿を調査することによって本古墳群の様相を評価するための重要な情報を入手することと、古墳の所属時期を決め、周囲の遺跡、中でも古墳時代中期の豪族居館とされる古屋敷遺跡との関連の有無を明らかにすることを目的として実施する。

調査は 5 年間継続する予定で今回は第 2 次調査にあたる。第 2 次調査ではくびれ部、後円部、前方部の墳頂平坦面の様相を明らかにすることを目的として実施した。

## 引用文献

- 福島県立博物館 1987 年 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告第 16 集  
辻 秀人 2006 年 『東北古墳研究の原点 会津大塚山古墳』新泉社



写真1 調査風景

## 第1章 古墳の立地

### 第1節 古墳と周辺の地形

灰塚山古墳は喜多方市慶徳町新宮字小山腰 2908-1 に所在する。会津盆地の西側を画する越後山地の東側の縁辺にあたる丘陵上に立地する。会津盆地の平坦地と西側山地との境界にある丘陵末端部で、周囲を解析された独立丘陵の頂上部分に古墳が築かれている。丘陵を構成する土層は七折坂層で、河川の堆積物である砂層、礫を主体とし、火砕流堆積物も含まれる。七折坂層は断層が至近距離にあるため、層位が傾斜している（註1）。

### 第2節 歴史的環境

灰塚山古墳は会津盆地西部に分布する宇内青津古墳群中の北端に位置する大型前方後円墳である。宇内青津古墳群を構成する主な古墳は前方後円墳12基、前方後方墳3基で会津盆地の平野部から西側丘陵上まで広く分布している。最古段階は会津坂下町杵ガ森古墳、白ガ森古墳で、古墳時代前期でも古い段階にあたる。福島県最大の前方後円墳である亀ヶ森古墳とその横に並ぶ前方後円墳、鎮守森古墳は近年いずれも前期古墳と考えられており、他に森北1号墳、雷神山1号墳、虚空蔵森古墳、出崎山3号墳、7号墳が前期古墳と考えられている。中期、後期になると古墳は減少し、わずかに長井前ノ山古墳が中期、鍛冶山4号墳が後期と考えられている。天神免古墳は前期または、中期で所属時期が確定していない。

ところで、近年喜多方市古屋敷遺跡が発掘調査の結果、中期後半の豪族居館であることが判明し、国史跡に指定された。古屋敷遺跡に拠点をおいた首長の墓は当然宇内青津古墳群中にあるのが自然である。現在その候補として古屋敷遺跡に近い天神免古墳、虚空蔵森古墳、灰塚山古墳が考えられている。いずれの古墳も未調査で築造時期が確定せず、古屋敷遺跡と対応する古墳は確定していない。

灰塚山古墳の立地する独立丘陵は、国指定史跡新宮城跡と接し、すぐ西側にあたる。新宮城跡は中世の城館跡であり、中心部分によくその本来の姿をとどめている。その中心は14世紀にあり、15世紀まで存続したと考えられている。灰塚山古墳は新宮城から西側を見たときに、最も近い丘として目に入る位置にある。灰塚山古墳の位置に新宮氏の墓所が想定されており、中世においての何らかの意味をもち、使われた可能性もある。

註1 福島県立博物館竹谷陽二郎氏のご教示による。



第1図 宇内青津古墳群分布図

## 第2章 発掘調査成果

第1次調査で前方部、後円部墳頂の一部を調査し、後円部と前方部の墳丘構造と墳端を確認した。第2次調査では、後円部墳頂平坦面上の塚状遺構の様相を把握するために、第1次調査第4トレンチを東西に拡張して西側をb区、東側をc区とした。また、塚状遺構の北側に第5トレンチを設け、塚状遺構の北側を確認し、塚状遺構の全体状況を把握することに努めた。第1次調査で後円部、前方部ともに主軸上の墳丘構造、墳端を確認したことを踏まえ、東西のくびれ部の様相と墳端を確認するために第6、7トレンチを設定した。

### 1. 前方部墳頂平坦面の調査

#### (1) 第3トレンチb区(第2図、写真2~3)前方部墳頂平坦面の調査

第1次調査では、前方部墳頂平坦面の様相を知るため、古墳主軸東側に小規模な第3トレンチを調査した。調査の結果墳丘上面と小規模な土壌(SK01)が検出された。しかし、調査範囲が狭く前方部墳頂平坦面全体の様相を把握するには至らなかった。そこで第2次調査で古墳主軸の西側のやや広い範囲を調査区とし、第3トレンチb区とした。第1次調査第3トレンチは第3トレンチa区と改称した。

トレンチ内の表土を除去し、墳丘上面を検出した。全体に礫が散らばっており、トレンチ北側を中心とした範囲に黄色の土が確認された。黄色の土は第1次調査3トレンチaの墳丘面の特徴と一致するため、両者は同一層であると考えられた。トレンチ東側を中心に川原石からなる集石が発見された。川原石は古墳周囲の地山の構成する層には存在しないため、人為的に持ち込まれたものであると考えられた。検出当初は、隣接する新宮城に関わる中世遺構の可能性が考えられた。集石の下部に遺構が存在する可能性を考慮し、全体の精査を完了してから、集石にL字形にサブトレンチを設置し、集石の平面を記録しながら石を取り除いて掘り下げを行った。サブトレンチ調査の結果、集石は墳丘上面にだけ見られ、下部に掘り込みは確認できなかった。確認のためサブトレンチを含む集石北西側1/4を掘り下げたが、遺構は確認できなかった。遺物も出土しなかったため、集石の時期、性格は確認できなかった。集石の性格は今後の調査の進展の中でさらに検討する必要がある。

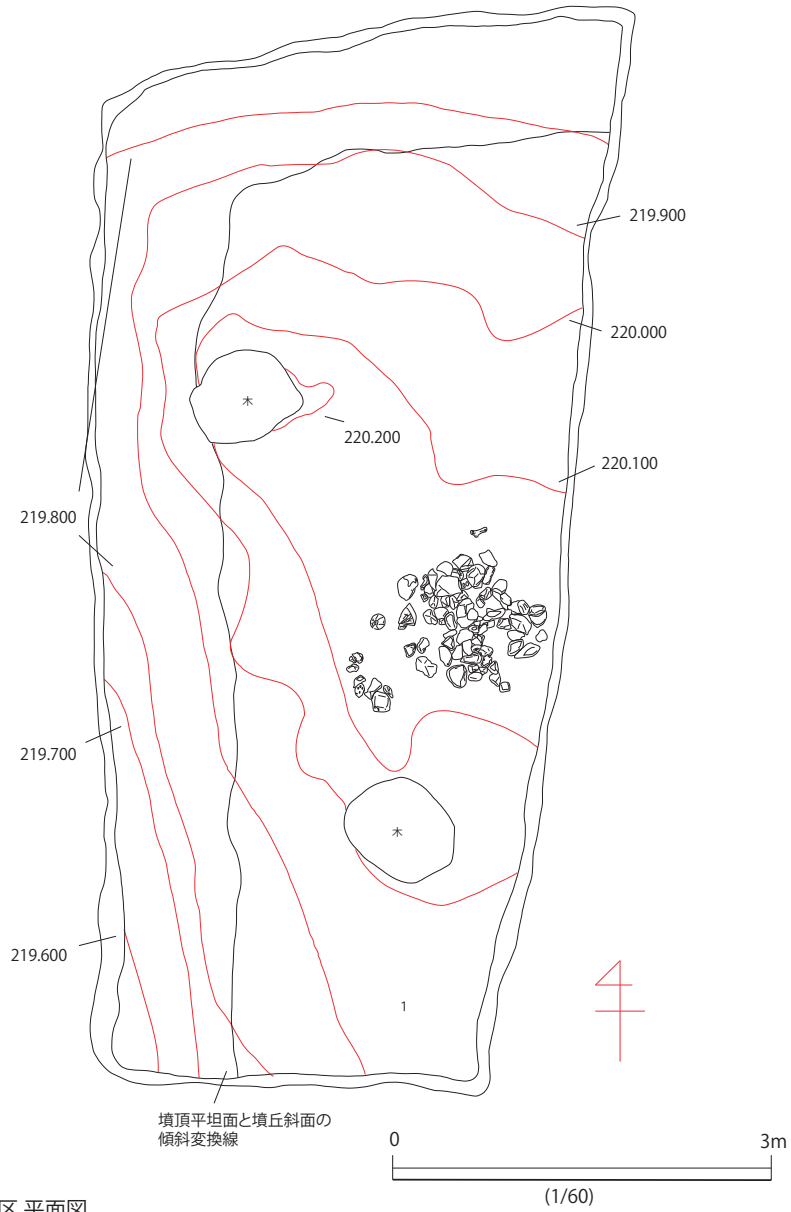
(名久井伸哉)



写真2 第3トレンチb区 全景



写真3 サブトレンチ 東壁



第3トレンチb区平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue10YR6/3 にぶい黄橙	弱	中	シルト	礫混じり極小～極大 全体の5%

第2図 第3トレンチb区 平面断面図



## 2. 後円部塚状遺構の調査

### (1) 第4トレンチb、c区(第3図 写真4~5)後円部塚状遺構東半部の調査

灰塚山古墳の墳頂平坦面は、一般的な古墳と異なり、本来ならば平坦である部分が塚状に盛り上がった状態になっている。この塚状の盛り上がりは、古墳築造時に構築されたものか後世に付加されたものかを判断することは古墳を理解する上で重要である。前年の第1次調査では、塚状遺構の中央付近にある近年掘られたと見られる穴を含めて古墳主軸に沿ったトレンチを設け、第4トレンチとした。第4トレンチ調査の結果、この塚状構造物が古墳本来の施設ではなく中世または近世の遺構で、隣接する国史跡新宮城跡に関わる遺構の可能性があることが示された。それを受け今年の調査では、墳頂平坦面に存在する塚状遺構の様相と、遺構と古墳の地山部分の境界を探るため、後円部東側半分には第4トレンチb、c区の2つのトレンチを設定した。第1次調査第4トレンチは第4トレンチa区と改称した。

後円部は全体が腐葉土の層に覆われていたため、まずこの腐葉土の層の除去を行い、全体の様相の確認を行った。

表面の腐葉土を除去した後、表土はぎ、清掃を行った。その結果、塚状構造物の最上部、段築部(形状は四角)、墳頂平坦面を確認することができ、これは北側に隣接する第5トレンチa区、5トレンチb区の様相と合致した。塚状遺構は全体に方形を呈し、大きさは第5トレンチの成果を参照すると、東西方向に約8m、南北方向に約10mを測った。墳頂平坦面からの高さは60cm前後である。塚状遺構の最上層は黒色シルトでその下層に多量の川原石の集積が認められた。川原石は長径10cm前後で砂利に近く、周辺の地山の土とはまったく異なり、明らかに持ち込まれたものと考えられた。

塚状遺構の中央部分には円形に近い形のもう一段高い部分が認められた。ただ、この高まりは近年掘られたと見られる穴に接しており、穴を掘った際に彫り上げられた土が積み上げられた結果残されたものである可能性が高く、塚状遺構の本来の形ではない可能性が考えられた。

腐葉土、表土の除去作業中、トレンチの中央部から2点、その西側から1点、南側から2点の遺物が出土した。多くが近世、近代の遺物であり、塚状遺構の築造時期を想定できるものではなく、古墳の年代の特定への手掛かりともならなかった。

塚状遺構東半部は全体に低い方形をしており、調査当初の円形塚状の形態の想定とは異なっていた。塚状遺構の性格解明は今後の課題となった。

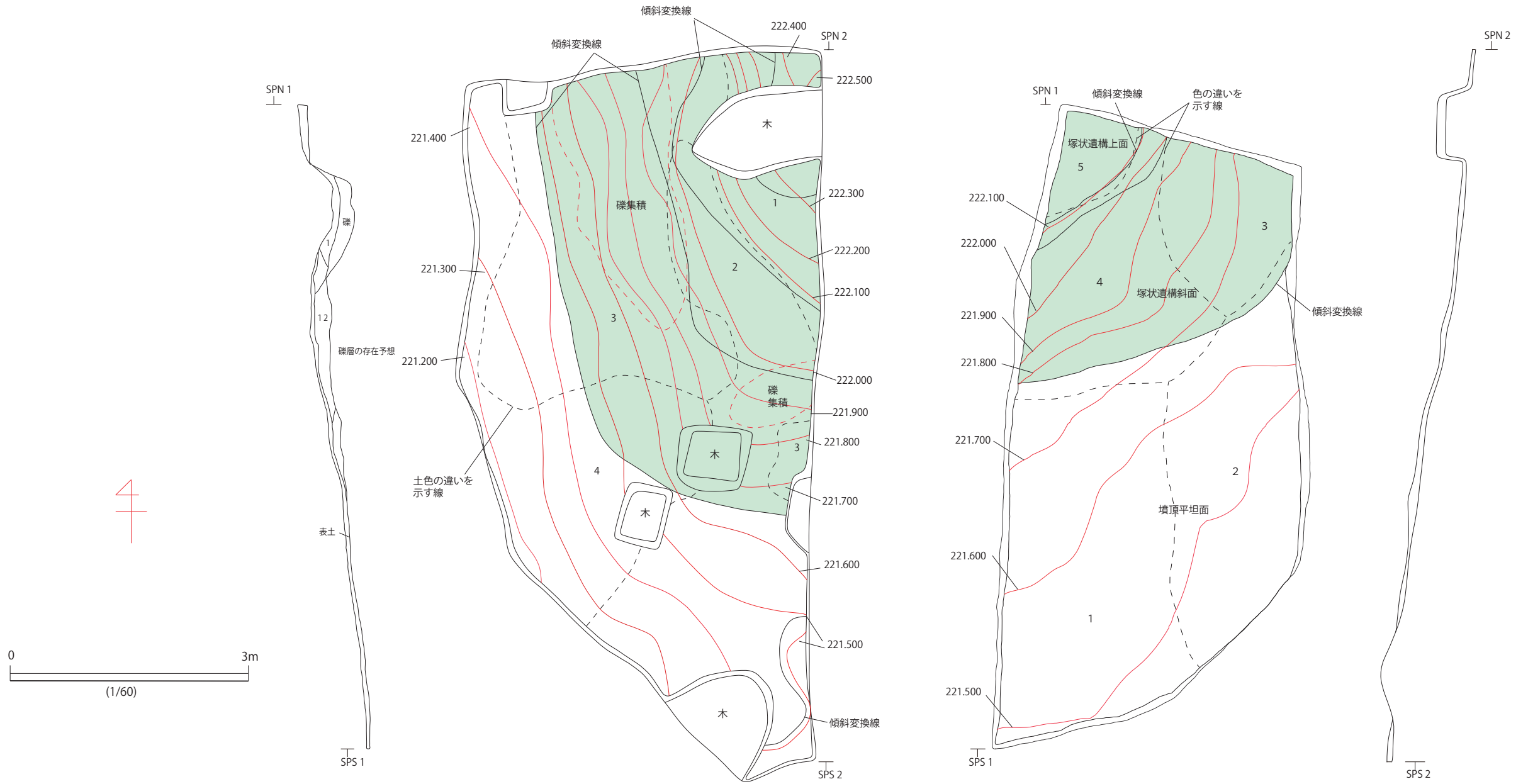
(武田翔平)



写真4 第4トレンチb区 北側



写真5 第4トレンチc区 段築部



第5トレンチb区 平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue10YR6/6 明黄褐	弱	中	シルト	
2	Hue10YR6/3 にぶい黄橙	さらさら	強	シルト	極大の礫(3~7cm)15%
3	Hue2.5YR6/4 にぶい黄	弱	中	シルト	
4	Hue10YR5/6 黄褐	中	中	シルト	

第4トレンチb区 平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue10YR4/3 にぶい黄褐	弱	中	シルト	極大の礫5%含む
2	Hue10YR6/3 にぶい黄橙	弱	中	シルト	極大の礫5%含む
3	Hue10YR4/4 褐	弱	中	シルト	
4	Hue10YR4/2 灰黄褐	弱	中	シルト	
5	Hue10YR7/3 にぶい黄橙	弱	中	シルト	

第4トレンチb区 断面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
表土	Hue7.5YR3/2 黒褐	弱	弱	シルト	
1	Hue10YR4/4 褐	弱	中	シルト	大の礫が20%混入
2	Hue10YR4/3 にぶい黄褐	弱	中	シルト	極大の礫が10%混入

第3図 後円部南側 (左: 第5トレンチb区 右: 第4トレンチb区)

(2) 第5トレンチ a 区、b 区 (第4図 写真6~7) 後円部塚状遺構北半の調査

第5トレンチは後円部墳頂平坦面上にある塚状遺構の北半部の様相を解明するため設定した。

調査区は当初、主軸から10cm程西側の線にトレンチ領域東端を合わせつつ、後円部墳頂平坦面の北西4分の1の領域に設定し、後に北東4分の1の領域も発掘対象とした。前者を第5トレンチ a 区、後者を第5トレンチ b 区とした。

表土を除去した段階で、塚状遺構の上部は円形に盛り上がっていること、下部は長方形で、墳頂平坦面から60cm程度の高さであることが判明した。精査し、塚状遺構北半の全容が判明した。塚状遺構は下段が低い長方形の壇状で、中央部に円形にもう一段土が盛り上げられている二段構造である。上段では比較的大振りの川原石と茶色でシルト質の土層が観察された。第1次調査で確認した近年の攪乱の埋め土と共通することから、上段は攪乱が掘られた際に周囲に積み上げられた土である可能性が考えられた。下段を構成する土層は平面で観察する限り上層が白色シルト、下層は大量の小礫であった。下層の小礫群は塚状遺構の斜面に広く観察され、大量の小礫群が存在することが予想された。下段の土層構成は第4トレンチで確認した塚状遺構南半部と同様である。

塚状遺構の下段は、第4トレンチの成果を総合すると南北約10m、東西約8m程に及ぶ長方形であった。上段周辺において近世の火鉢破片が出土しているが、遺構の年代を特定できる遺物は出土していない。塚状遺構の時期、性格の解明は今後の課題として残された。

塚状遺構の周囲には黄土色で粘土質の土層が広がることが確認された。土層は第1次調査第1トレンチで確認した墳丘積み土と同じであり、墳頂平坦面であると考えられた。

第4トレンチの成果を総合すると、塚状遺構の下段の形状は略方形で、後円部墳頂平坦面のやや北側に寄った位置に墳頂平坦面をほぼ覆うほどの規模で築かれている。塚状遺構の時期、性格については不明な点が多い。隣接して国指定史跡新宮城跡が存在することから、関連の遺構である可能性も否定できない。もし新宮城跡に関連する遺構であれば、墳墓や経塚の可能性も考えられる。次年度に予定している第3次調査では記録を残しながら塚状遺構を掘り下げ、時期、性格を解明したい。

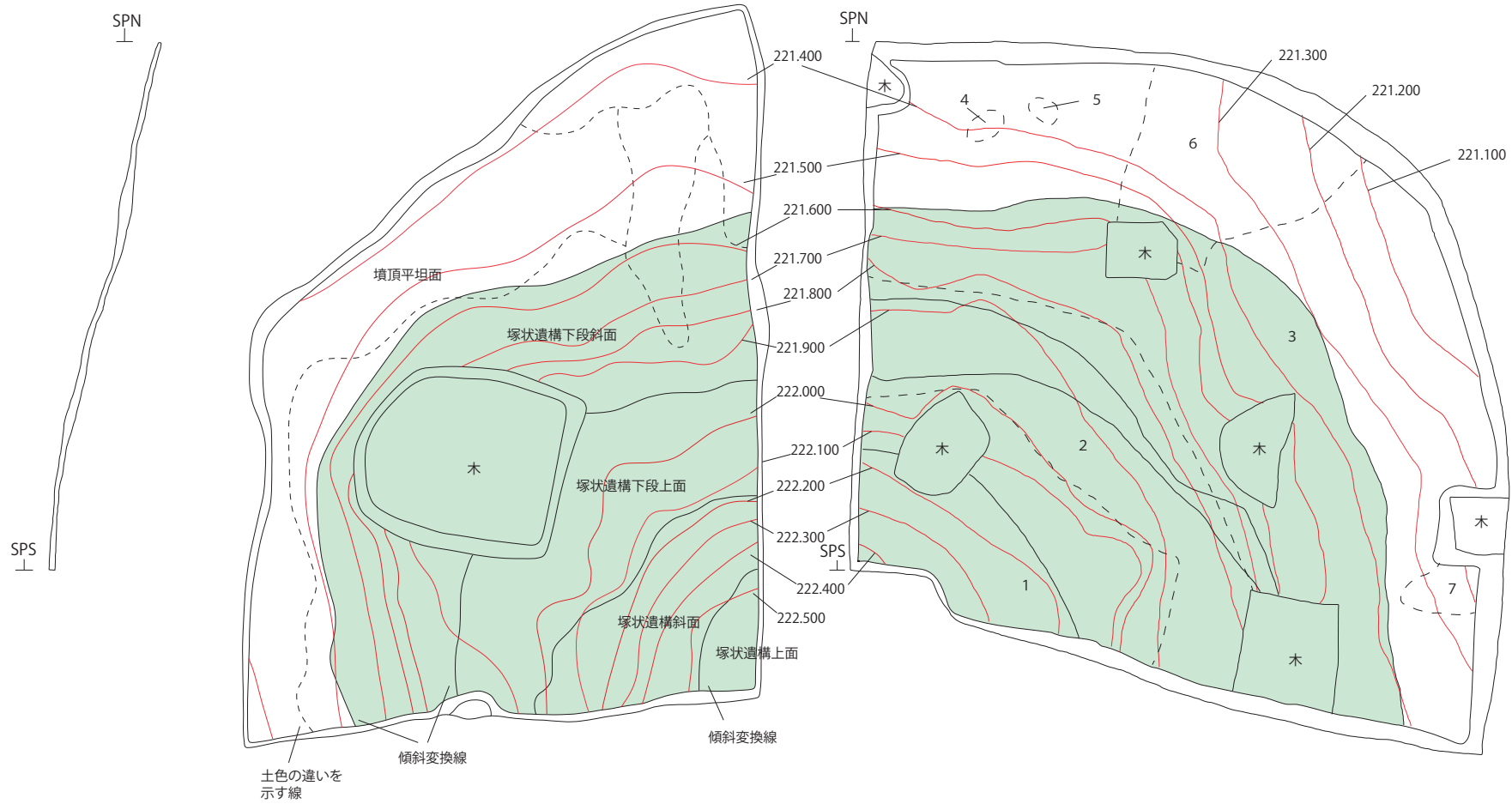
(横田竜巳)



写真6



写真7

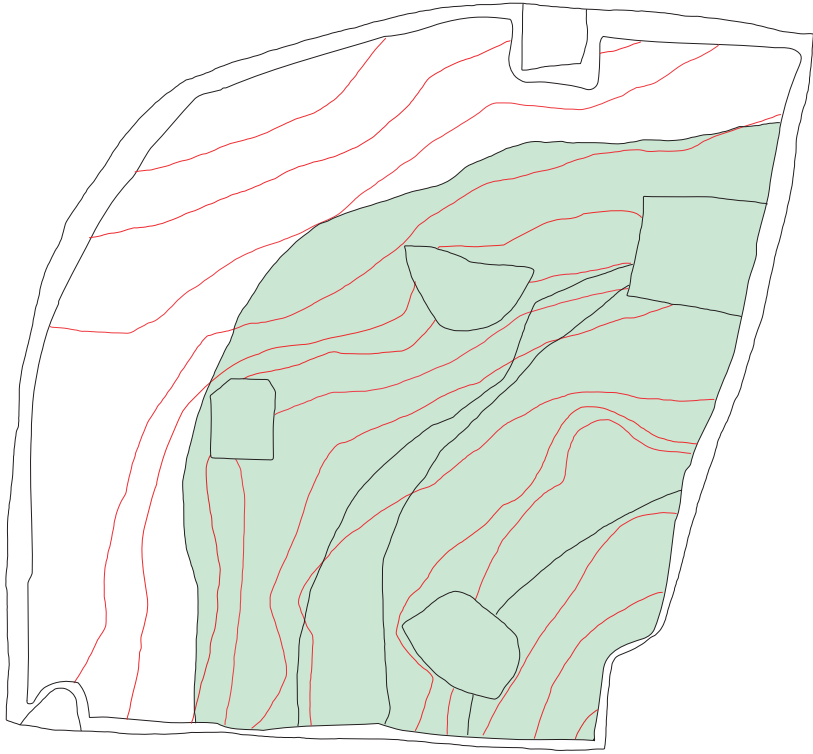


第4トレンチ c区 平面図

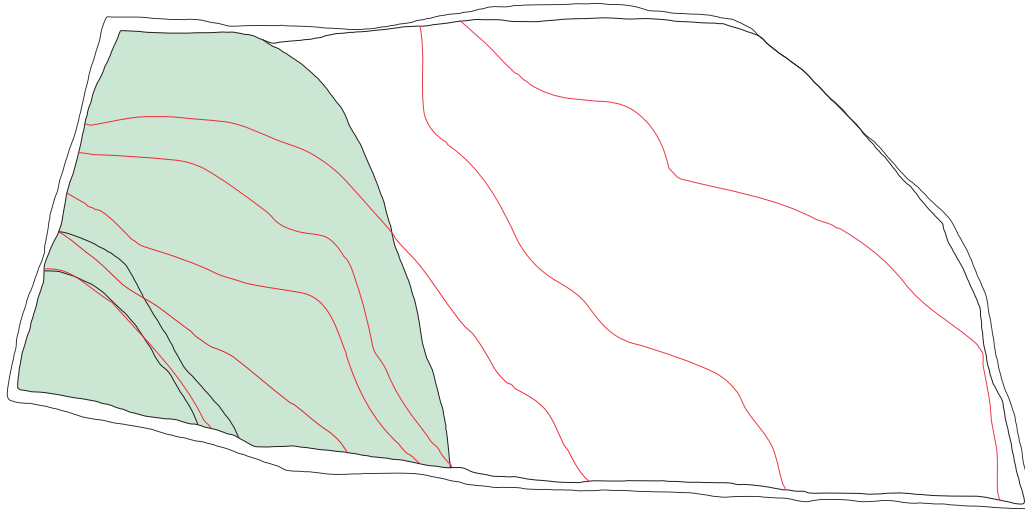
層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue10YR5/4 にぶい黄褐	弱	中	シルト	
2	Hue10YR5/3 にぶい黄褐	弱	中	シルト	
3	Hue10YR7/2 にぶい黄橙	弱	中	シルト	
4	Hue10YR5/3 にぶい黄褐	弱	中	シルト	
5	Hue10YR5/3 にぶい黄褐	弱	中	シルト	
6	Hue10YR5/6 黄褐	弱	中	シルト	
7	Hue10YR4/3 にぶい黄褐	弱	中	シルト	

第4図 後円部北側 (左: 第5トレンチ a区 右: 第4トレンチ c区)

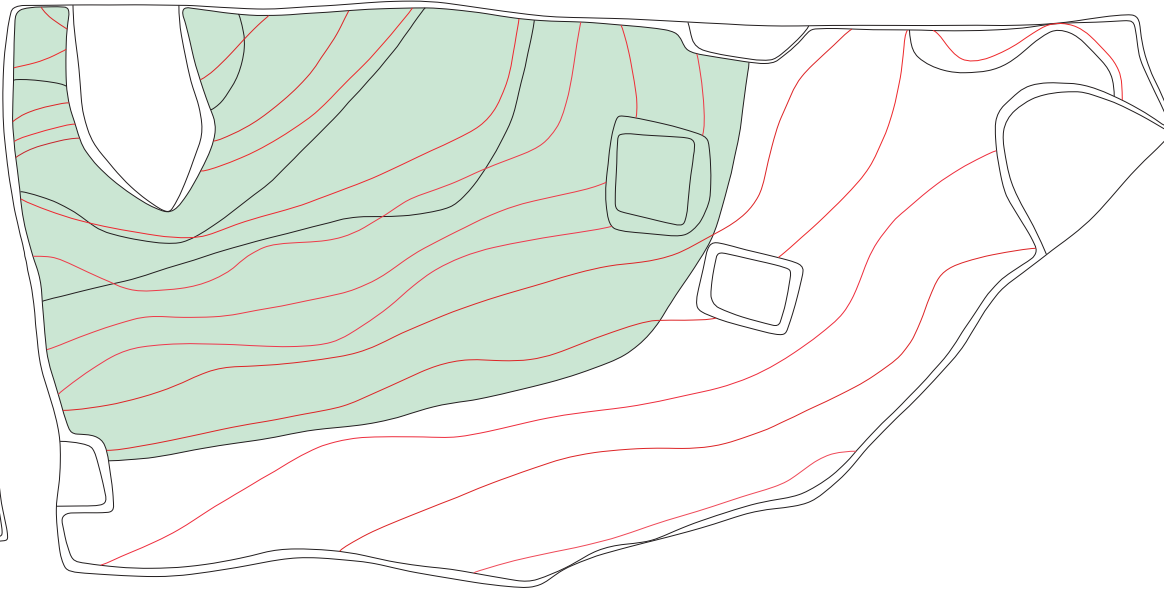
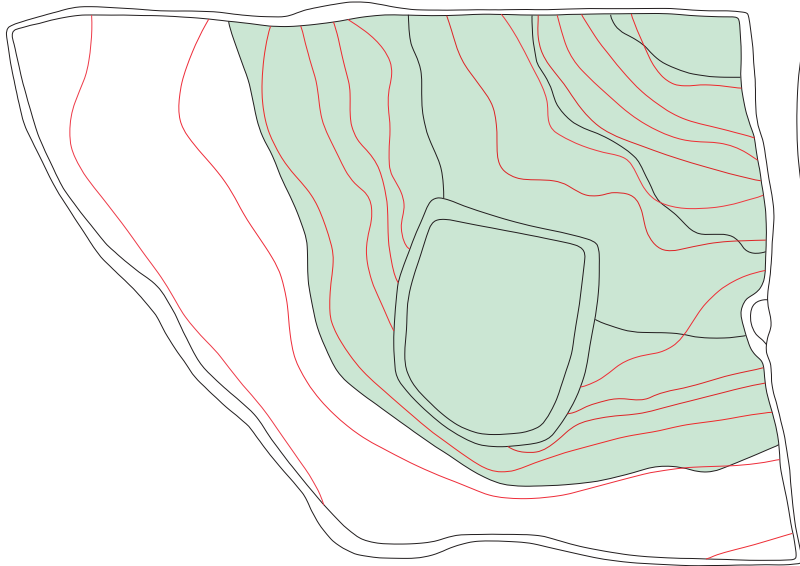
y=107  
+ x=94



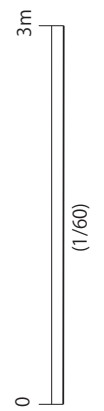
+ x=100



+ x=110



第5図 後円部塚状遺構全体図



### 3. くびれ部の調査

#### (1) 第6トレンチ 東側くびれ部の調査 (第6図 写真8~9)

第6トレンチはくびれ部の墳丘構造を把握するとともに、墳端を確認することを目的として設定した。トレンチは東側くびれ部と想定される部分に墳頂平坦面から西側にあたり、幅2m、長さ20mである。

トレンチ内の表土及び墳丘流出土層を掘り下げ、墳丘面を確認した。墳丘面を精査したところ、墳丘面は4層の土層が確認できた。明らかになった土層は、上層から、(1) 明黄褐色で多く礫が含まれている層、(2) 黄橙色であまり礫が含まれていない層、(3) 明黄褐色で(2)よりやや締りの強い層、(4) 黄褐色で礫が他の層より多く含まれている層である。(1)、(2)層は、礫を多く含んでいることや、地山の粒子を含んでいることなど、人為的に動かされた様相が観察され、墳丘積み土と判断した。(3)、(4)層は均質なシルト層で層が漸進的に変化するため、地山と判断した。従ってくびれ部の墳丘は地山を削るとともに、削られた土を積み上げることで作られていることが判明した。墳丘斜面には明瞭なテラスは存在せず、東側くびれ部は一段であることが分かった。

墳端は地山である(4)層を削り、墳丘外側と墳丘斜面の角度を変えることで作り出されていた(写真9)。トレンチの中央部分はややくぼみ、谷折れ線状の部分がある。この部分で前方部墳丘斜面と後円部墳丘斜面が接続している。平面図中の等高線もこの部分で変化しており、図面からも古墳のくびれ部であると考えられる。

東側くびれ部では明瞭な墳端とくびれ部を検出し、古墳の形状を把握する重要なデータを得ることができた。

(高橋萌子)

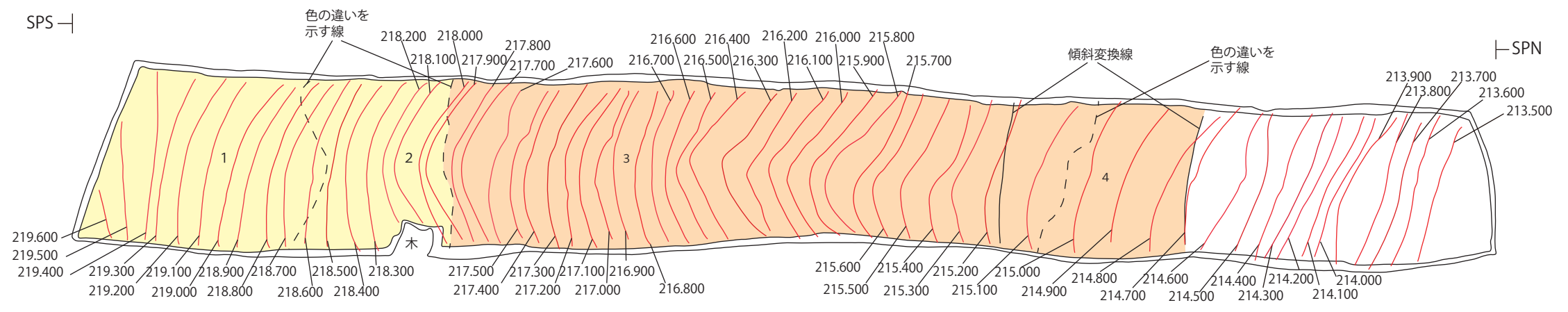
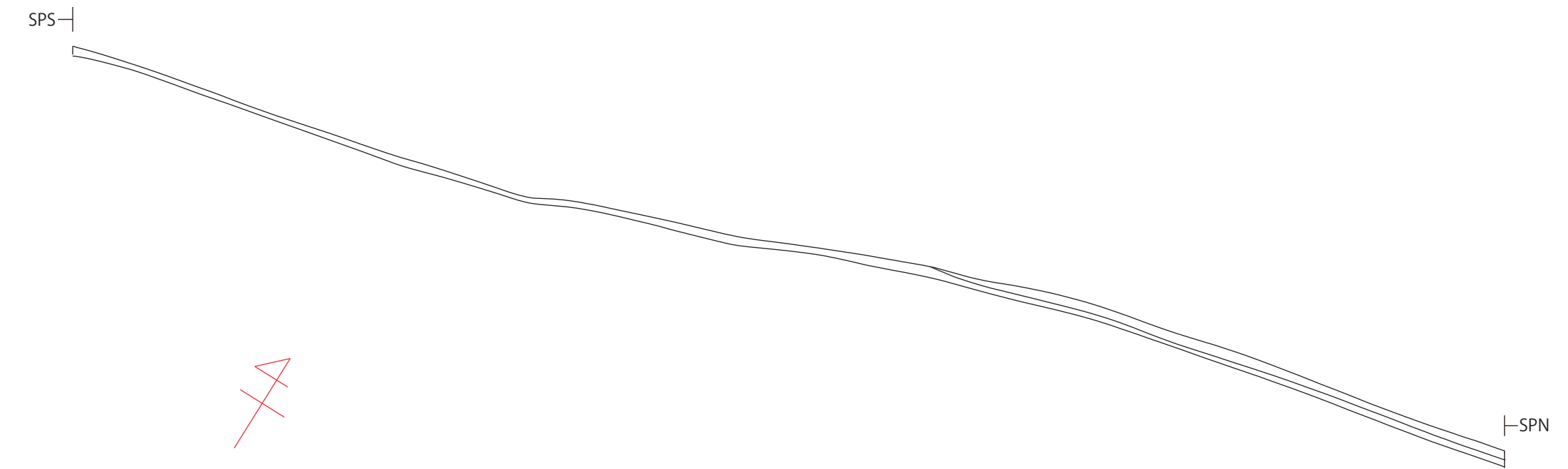


写真8 第6トレンチ調査風景



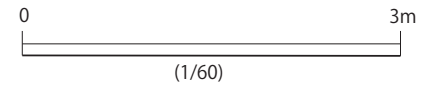


写真9 第6トレンチ 全景



第6トレンチ 平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue10YR6/6 明黄褐	中	中	シルト	
2	Hue10YR6/4 黄橙	弱	中	シルト	3よりややしまりは弱い
3	Hue10YR6/6 明黄褐	弱	中	シルト	
4	Hue10YR5/6 黄褐	弱	強	シルト	



第6図 第6トレンチ

(2) 第7トレンチ（第7図 写真10～12）西側くびれ部の調査

第7トレンチではくびれ部の墳丘構造を把握するとともに、墳端を確認することを目的として、くびれと想定される部分に沿って東側に墳頂平坦面から墳端にかけて幅2m、長さ12.3mに設定した。

トレンチ内の表土及び墳丘流出土層を掘り下げ、墳丘面を確認した。墳丘面を精査したところ、墳丘面は5枚の土層が確認できた。明らかになった土層は、上層から、(1)黄褐色で多く礫が含まれている層、(2)黄色で礫があまり含まれていない層、(3)黄褐色で一部締りが高い層、(4)黄褐色で後部にいくほどしまりが弱くなる層、(5)暗褐色で礫が他の層より多く含まれている層である。(1)、(2)、(3)層は礫を多く含んでいることや、地山の粒子を含んでいることなどから、墳丘積み土と判断した。(4)、(5)層はシルト質で均質な層で、層の境も曖昧なため地山と判断した。

検出した墳丘斜面では等高線の流れが特に変化の様子は見られず、くびれ部を明瞭には確認できなかった。西側墳丘斜面では後円部墳丘と前方部墳丘とがゆるやかに変化すると考えられた。

墳丘斜面の中程、(3)層にあたる場所で、傾斜がゆるやかになり、不明瞭ではあるが、テラスがと考えられた。墳端は(5)層を削り平坦面と墳丘斜面の角度を変えることで作り出されていたということがわかった。

遺物は墳丘斜面の確認作業中に均整のすり鉢破片が出土したが、古墳の時期を推定できるような遺物は出土しなかった。

第7トレンチの目的はくびれ部の墳丘構造を把握するとともに、墳端を確認するということなので、今回達成することができた。くびれ部の墳端を確認することができたことにより、古墳全体の大きさを推定することができるだろう。

(菅原健太)



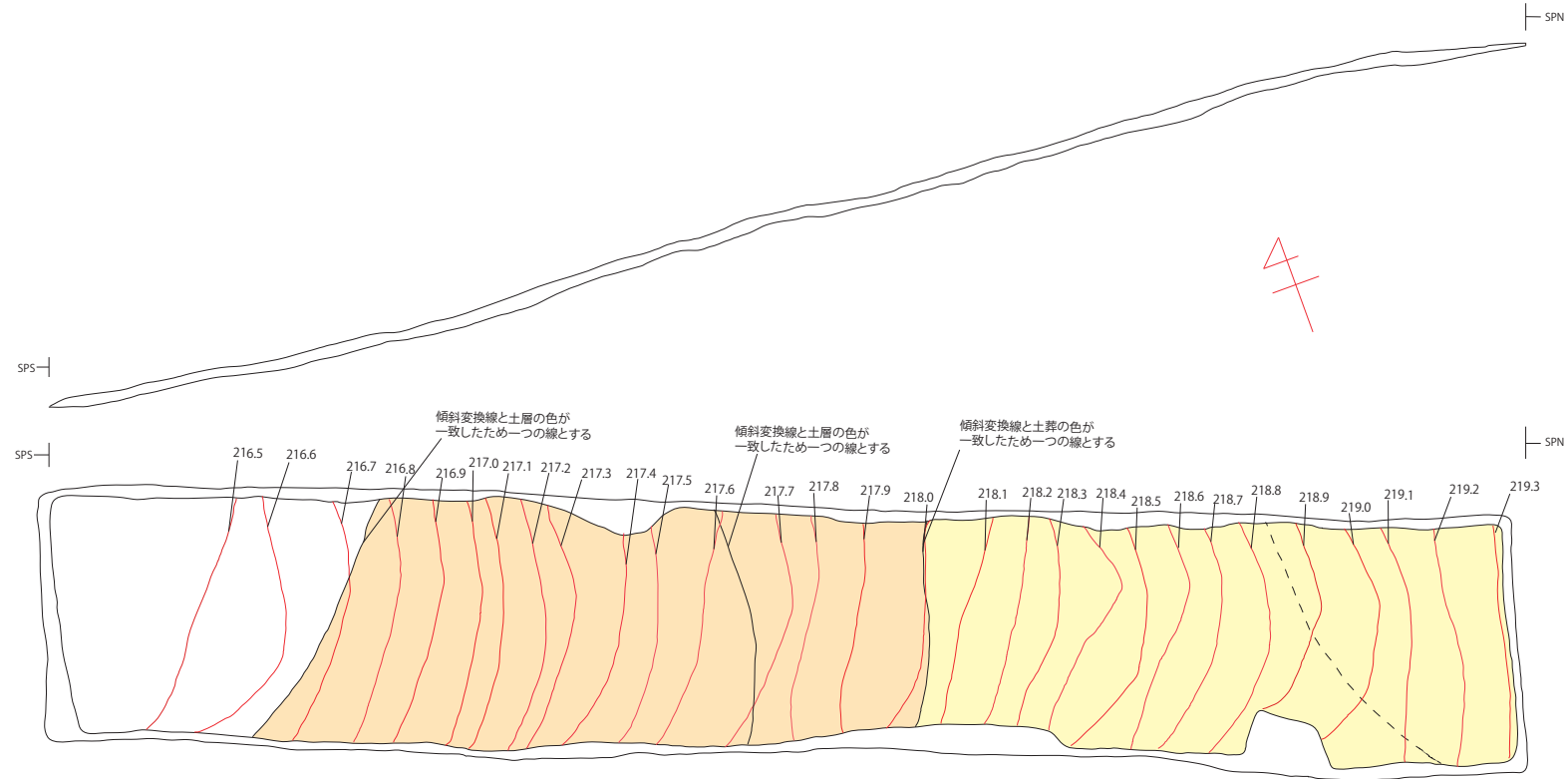
写真10 第7トレンチ調査風景



写真11 第7トレンチ 全景

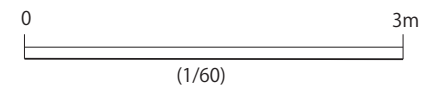


写真12 テラス部



第7トレンチ 平面図

層	土色	粘性	しまり	シルト	備考
1	Hue10YR5/4 にぶい黄褐	弱	中	シルト	礫混じり小～極大 全体の面積7%
2	Hue2.5YR6/3 にぶい黄	中	弱	シルト	両サイドのしまり中 礫 中～極大 7%
3	Hue10YR5/4 にぶい黄褐	中	弱	シルト	一部しまり中 礫 小～極大 7%
4	Hue10YR5/4 にぶい黄褐	中	弱	シルト	後円部にいくほどしまりが弱 礫 極小～極大 2%
5	Hue10YR3/3 にぶい黄褐	弱	中	シルト	礫 極小～極大 面積10%



第7図 第7トレンチ

## ま と め

灰塚山古墳は宇内青津古墳群の最北の大型前方後円墳として知られていたが、その詳細は長く不明であった。昭和61年に福島県立博物館により測量調査が行われ、全長61.20mを越える大型前方後円墳であることが判明した。測量調査の段階で、灰塚山古墳が独立丘陵のほぼ全体を利用し、丘陵の一部を改変することで前方後円墳の姿を作り出していることが予想された。また、前方部が高く作られている点に特色があり、東北地方の他の古墳とは違う様相がある点も注目された。

昨年度実施した第1次調査では前方部と後円部の墳端を確定するとともに、地山を削り、削られた土を盛ることで墳丘が作り出されていること、後円部にはテラスがある可能性が確認された。後円部、前方部ともに墳頂部の様相を小規模なトレンチを設定して検討したが、明瞭には把握できなかった。

今年度の第2次調査では、後円部、前方部墳頂平坦面、墳丘くびれ部を対象とした。

後円部墳頂平坦面は従来から塚状の遺構があり、近年攪乱を受けていることがわかってきた。調査では塚状の遺構は上段に円形の高まりがあり、下段が一辺10m前後の略方形を呈することが判明した。上段は攪乱で掘り出された土が積まれたものであると考えられたが、下段の方形壇が古墳に伴う施設であるのか、隣接する新宮城跡と関わる可能性があるのか現状では判断できない。前方部墳頂平坦面には集石遺構が確認されたが、所属時期、性格ともに不明である。

くびれ部の調査では東西の墳端を確認するとともに、前方部、後円部と同様の墳丘構造を持つことが判明した。また、後円部から前方部への墳丘の接続状況を把握することができた。

第2次調査では墳頂平坦面の様相を把握し、墳丘構造をほぼ明らかにすることができた。来年度は後円部墳頂の塚状遺構を掘り下げその時期、性格を探求すると共に後円部の東西の墳丘部分を調査し、後円部形態、テラスの範囲等を明らかにしたい。

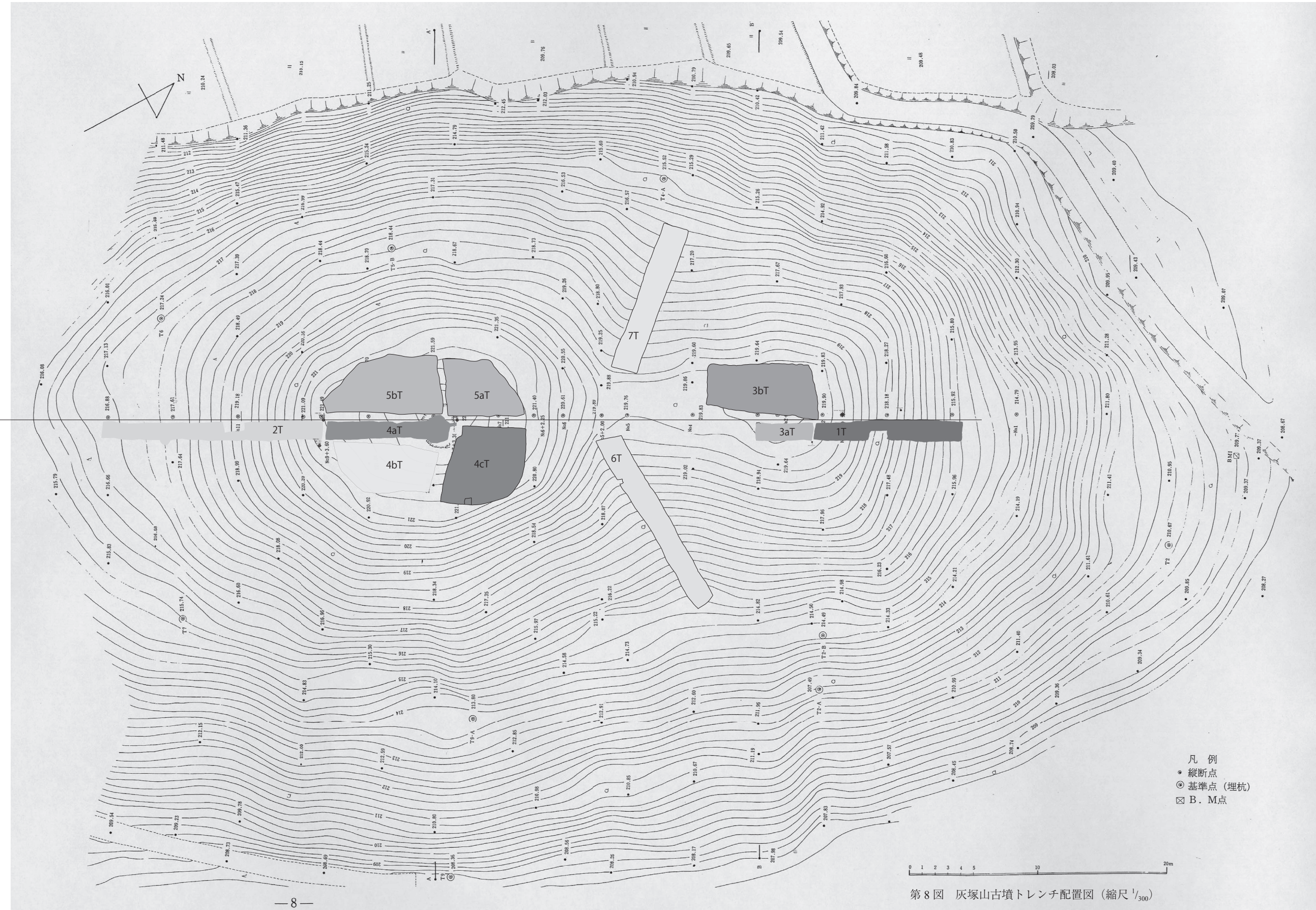
(辻 秀人)

## 引 用 文 献

福島県立博物館 1987年 『古墳測量調査報告』福島県立博物館調査報告書第16集

## 謝 辞

灰塚山古墳の第2次調査にあたり、調査を快諾くださいました。土地を所有する新宮区及び新宮区長田部文市氏、新宮区の皆様に心より感謝申し上げます。また、調査の実施にあたり、ご配慮、ご支援頂きました喜多方市教育委員会、山中雄志氏、片岡洋氏、宿舎をご提供いただきました矢部善兵衛氏に御礼申し上げます。



第 8 図 灰塚山古墳トレンチ配置図 (縮尺 1/300)

第 8 図 トレンチ配置図